

祭礼における「御船歌」

西岡陽子

はじめに

「御船歌」とは、近世期に幕府や藩の新造船の船下ろしや領主の船出などに歌われた儀礼的な船歌をいい、一般的な「船歌」つまり船頭歌や綱引き歌とは一線を画するものである。

これらは幕府や諸藩のお船手のうち、「歌水主」など^{うたかこ}と称される「御船歌」歌唱を専門とする人々によって担われていた。近世初頭に謡曲を基調として成立したとされるが、曲目は多数あり、その性格も多様なものが含まれて、近世期に流行した各種の歌も歌い込まれている。

幕藩体制の消滅とともに芸能伝承は完全に途絶しており、その詞章を記録した「御船歌」本が残るのみで芸能的側面については不明なことが多い。一方、各地で船の乗り初め、船下ろしなど船をめぐっての儀礼の場面で受容されている。また海辺の神社の神輿渡御や海上渡御などにも歌われている。あるいは都市型祭礼における船型屋台に伴って伝承されている事例も少なくない。

「御船歌」研究は、主として御船歌本の詞章の分析を中心として歌謡史の中で進展しているが、祭礼に受容された民俗芸能としての「御船歌」の実態は明らかでない。本稿は、祭礼における「御船歌」の歌唱の実際や祭礼における位置づけや機能を具体的事例をもとに検討し、祭礼の囃子としての「御船歌」の実態を探ろうとするものである。なお、浅野健二氏は祭礼に受容された「御船歌」を「祭礼御船歌」と名付けている。本稿ではこれを踏襲し、「祭礼御船歌」の語を用いて「御船歌」と区別している。

さて、さきに述べたように、「御船歌」は幕藩体制の終焉とともに急速に衰微し、研究の俎上に上がる頃には、その実態は

ほぼ失われていた。

本論では、1において先行研究を参考に近世期における「御船歌」の概要を整理し、2においてその具体像を諸資料から明らかにしたうえで、3で現行の「祭礼御船歌」が「御船歌」の伝統をどのように継承し、あるいは伝統から離れていわば民俗化しているのかを事例をもとに考察する。また、祭礼御船歌が本論のテーマであるが、これを明らかにすることによってひいては近世期における「御船歌」の芸能の実態もある程度明らかにできるものと考えている。

1. 「御船歌」の概要

さきに述べたように、「御船歌」研究は歌謡としての側面からの研究として進展してきた。それは『日本庶民文化資料集成5 歌謡』（芸能史研究会編、三一書房、1973年）の御船歌本の集成などに現れている。ここでは主として本書の浅野健二氏の論考によってその概要を整理しておく。

藩主の御座船は海御座船と川御座船の二種があったから、内陸の諸藩も「御船歌」を伝習していた可能性はあるが、現在、管見に入る限り所在が判明している諸藩の「御船歌」本は以下のとおりである。

幕府・水戸・尾張・仙台・福井・明石・姫路・鳥取・松江・岡山・広島・長府・高松・徳島・伊予・松山・伊予吉田・土佐・福岡・豊後（肥後）・平戸・対馬（浅野健二「御船歌集成」、『日本庶民文化資料集成5』1973の凡例によるが一部私見により追加した）。

西国諸藩に比重があるのは、参勤交代の際、西国諸藩は船団を組んで瀬戸内海を航行することを許されていたからで

ある。つまり参勤交代が「御船歌」の歌唱の第一の機会であった。

名称は「御船歌」を主とするが、「船歌」、「櫂歌」、「棹歌」などの呼称も見受けられる。基本的な部分は江戸時代初期に謡曲や狂言歌謡⁽¹⁾に影響を受けて成立し、後には時々の流行小歌や浄瑠璃等を摂取した。

曲目は「黄(皇)帝」、「鎧どき」などに代表される物尽くし、道行など叙事的な長編のものと「かすり」⁽²⁾、「だんべい」などに代表される短詩形のものに大別される。前者は長歌、後者は端歌などと呼ばれることが多い。諸曲目の中で、「皇帝」、「初春(鎧どき)」はほぼすべての諸本中に登場し、しかも最初に掲げて重要な曲目と位置づけられている。

また「祭礼御船歌」としても多用されており、この場合もこの二つは儀礼的な歌として重用されている。とくに「黄(皇)帝」は、船の起源を語る神話的内容となっており。謡曲「自然居士」から採られたことが明らかで、おそらく「御船歌」成立の当初から存在した曲目とされる。

「黄(皇)帝」について儀礼歌として諸藩にほぼ共通して重用されているのが以下の「初春」である。

やや、めでたやな。はつ春の。よきひをどしの。きせながは。エイ、小ざくらをどしとなりける。エイ、さてまた夏は卯の花の。エイ、垣ねの水にあらひかは。秋になりてのそのいろは。いつもいくさに勝つ色の。エイ、紅葉にまがふ錦かは。冬は雪げの空はれて。エイ、かぶとの星の菊の座も。エイ、はなやかにこそをどしげの。思ふかたきをうちひとり。エイ、我が名を高くあげまくも。エイ、つるきは箱に治めおく。弓矢ふくろをいさざし。エイ、富貴の国となりける。ヤンラ。(仙台藩の「御船歌」として記録されたもの。参考資料①参照)

鎧や兜などの武具の意匠を四季の情景の中に読み込んで、雅びかつ勇壮に歌いあげ、めでたい言葉で締めくくるといふ、いかにも武家好みの格調高い歌となっている。

諸藩の御船歌本に収録された歌は、幕府に伝習されてきた船歌本である『御船唄留』とほぼ共通し、強い規範意識に支

配され地域性というものは希薄である。ただし、地元の地名を読み込んだものも存在し、各藩で独自のものも一部含まれる⁽³⁾

《歌唱の実際》 歌唱の形式は音頭取りがまず前半を歌い、これに続いて一同が後半を唱和する形を取り、木遣り歌との共通点が指摘されている。『和漢船用集』(金沢兼光編、文政10年刊)によれば、音頭取りは「歌出し」、一同は「歌組」としている。「御船歌」の諸本からは、サンジとツケという用語が一般的である。非常にゆったりとしたテンポ、荘重典雅な曲調で、儀式張った厳粛な雰囲気の中で歌われた。浅野氏は「端座して頭を垂れて荘重に歌う」と述べられているが、これは座敷における作法と思しく、次章以下で触れるように船上では櫂を操りながら勇壮に歌うものであったと思われる。

また最初に「出し歌」、「開歌」などと呼ばれる第一に歌う歌と、最後に歌う「留め歌」と呼ばれる祝儀性の強い歌が位置付けられ、その間に適宜いくつかの歌を入れて行くという構成を持っていた。

《歌唱の機会》 参勤交代の折に藩主が乗船する御座船に同乗して謡うのが基本で、出港や帰港、海上で櫂を操りながら歌うのが通例であるが、正月初めの乗り初め、新造船の船下ろしにも歌われた。また、参勤交代では海上を航行する機会のない仙台藩では終始松島遊覧に際して歌われた。紀州藩の場合は城下町祭礼であった和歌祭りがその最大の機会であった。

《囃子》 楽器については資料上は鐘・太鼓・拍子木・法螺貝などが上がっているが、鐘、拍子木、法螺貝などは出船の合図として用いられたものと推定される。たとえば姫路藩の場合は稽古は土用とか寒中に昼夜にわたって、「櫂拍子の稽古をした」とあり、また仙台藩や紀州藩などの記録からも拍子をとるものとしては太鼓や櫂拍子のみではなかったかと推定される⁽⁴⁾

《担い手と伝習》 御船手組⁽⁵⁾の中に唄水夫が組織されていた。その中に師匠格である音頭取り(頭取)と一般の歌い手

(歌カコ)があった。幕府の「御船歌」が規範となっていたと思われ、伝習は場合によれば江戸表あるいは大坂に向いて幕府の「御船歌」を伝習した。諸藩の「御船歌」本には「江戸吟」、「大坂吟」の名が冠せられているものがあり、一種の流派のようなものがあったと思われる。「江戸吟」、「大坂吟」は幕府の御船手が伝承していた「御船歌」である。

2. 近世期における「御船歌」の具体的事例

「御船歌」歌唱の実態については残された資料は少ないが姫路藩、松江藩の「御船歌」に関しては、「御船歌」を担っていた家の子孫が近代になって記録を残している。また仙台藩では、著名であった藩主の松島遊覧の記録に伴って仙台藩の「御船歌」歌唱の実際が記録されている。これら近世期における「御船歌」歌唱の実際を物語る資料によって、諸藩の「御船歌」を、その歌唱の特徴、歌唱の機会、曲目および各曲の機能、伝習の方法と機会、担い手などに関して整理を試みる。

姫路藩の御船手組は、船手200名。抱御水主37名。保有兵船60隻前後という規模で、その階級は大船頭以下、小船頭、矢倉、使役、御水主、抱御水主となっており、矢倉格・使役格として「音頭組」があった。

音頭組は、江戸吟歌指南一人(矢倉格)。その下に歌上^{うたあげ}三人、これが音頭取りに相当すると思われる。次に付歌乗組15人、総勢20人で編成されていた。『姫路藩御船手組の研究』によれば姫路藩の「御船歌」は、藩主本多忠国のころ(1682～1704)、元公儀音頭上ヶ神部伊右衛門を召し出し、音頭指南を命じて組織したという。

「御船歌」の歌唱の機会は「城主が御召御座船に乗船した場合に限り、白鉢巻、白櫓がけの甲斐甲斐しいでたちで、供奉同乗し、櫓の音の調子に合わせて、荘重なりズムで歌った」という。

また、1で示したように、「御船歌」歌唱の最大の機会は参勤交代の御座船上であった。姫路藩の場合は、藩主は城内から川御座船に乗って飾磨港に着き、そこで海御座船に乗り換えて大坂蔵屋敷へ行く。そこで再度川御座船に乗り換え

て淀川を遡上して伏見まで行く。伏見からは陸路を取ったから御船手組は伏見まで随行した。音頭組もこれについて伏見まで行っている。藩主の帰途は大船頭に引き連れられて京都伏見まで出迎えに赴き大坂蔵屋敷に常備した「御召御座船」に同乗し、淀川を下った。その後は陸路を先に帰り、加古川・市川御渡船上で「御船歌」を勤めた。参勤交代に次ぐ「御船歌」詠唱の場は、正月二日の乗り初めであった。この時は飾磨の沖合ですべての兵船を浮かべて、藩主が閩兵をし軍容を誇示した。ちなみに飾磨は姫路の最大の港町で、藩主の御座船の船蔵もここにあった。

波間に揺られる船の上で歌うのであるから、人並以上の声量と特殊な才能が必須の難しい曲であったという。年中稽古に励み、原則として他の御用は勤めなかったが、城主に接する名誉ある職とされ希望者が多かったという。

また、寛延三年、藩主は参勤交代の際に江戸まで音頭組を同行し、三カ月間にわたって幕府の「御船歌」を習わせた。すべての藩が同様であったかは疑問であるが、すくなくとも姫路藩では随時江戸へ赴いて幕府の「御船歌」を伝習させて歌の技量の刷新をはかっていた。この時に習得した「御船歌」を、それ以前の歌と区別して「新江戸吟」と称している。その後も再度江戸表に行き幕末には幕府御船手奉行名の「御船歌免状」を取得している。以上のように江戸期を通じて幕府の「御船歌」が規範となっていること、幕府の「御船歌」も時代を経るごとに新たな歌が生み出されていたこと、また幕府の御船手奉行は一種の家元のような立場になっていたことなどが分かる。

姫路藩の御船歌本には80曲ほどが納められている。その曲目は幕府の「御船歌」や諸藩の「御船歌」本と共通する歌が大半をしめているが、「飾磨八景」など^{しかま}というような播磨地方の地名が詠み込まれたものがあって独自の曲目が地元で作詞作曲されたらしい形跡がある。

さて、次に仙台藩の場合を見てみよう。仙台藩の場合は、水軍の威容を示す機会は参勤交代ではなく藩主の松島遊覧であった。天明8年(1778)の幕府巡検使を迎えての遊覧は、御座船以下大船団を組んでの盛大な遊覧であったようで、巡

検使の一行に随行した古川古松軒は、『東遊雑記』にその様子を書いている。

御船は仙台侯より出さるる楼船にて、結構なることは勿論にて、青・黄・赤・白・黒の幔幕打ち廻らし、五十挺立ての櫓に引船数十艘、供船数艘、役船に至るまでいろいろの幕・船印・長柄。吹貫などを飾り立て、浦風に翻り、船歌おもしろく、櫓拍子を揃えて島巡りする有様、何にたとえん方なく、人々の長途の労を忽ち忘れ、百年の寿を延ぶる心地して感激せざるものなし

また『奥州名所図会』（大場雄淵著）にもこの松島遊覧の記述があり、仙台侯の松島遊覧はよほど耳目を集めたとみえる。

そこには「前後八十棹の櫓脚を揃ひ、舷を撃つて水主楫取同音に棹の歌を发声す。音節甚だ古雅にして歎賞すべし」とある(参考資料①)。

ここでは18世紀末における「御船歌」に対する一般的印象は「甚だ古雅にして」と表現され、すでに古典的な歌に聞こえていたのである。

次はるか南、種子島にも「御船歌」の資料が残っている(参考資料②)。そこには領主が「歌之助うたでもうせ」と声をかけると歌之助が歌いあげる。そのあとに水主一同で続けて歌う。「恭 御船頭共かね太鼓を打ならず」とある。ここで注意されるのは、「先一番に櫓歌、二番さげ、三番にかすり、四番松口解、五番に浄也」とあって、その次第に一定の形式があったことが伺える点である。

3. 「祭礼御船歌」

以上のように、「御船歌」の実際を資料から確認した上で、今度は祭礼御船歌の実際を見ていきたいと思う。

まず、「祭礼御船歌」を、便宜上4つの類型に分けた。Aは和歌祭や萩住吉神社祭礼の場合のように、城下町祭礼の中で用いられ、祭礼においても藩に抱えられた歌水主が担っていたとされ、藩の「御船歌」の系譜を直接的にひくと伝えられている事例。

Bは、徳島県海部郡美波町西由岐の八幡神社秋祭りに出る関船型の屋台や、高松の石清尾八幡祭礼の飾り船に付随している「御船歌」のように、当該藩で「御船歌」が伝習されていたことが判明している藩内で、それを身近に見る機会のあった領内の町、とくに御座船が出港した港町の祭礼の中で取り入れられているとおぼしき例。

Cは、兵庫県赤穂市の坂越の船祭りや香川県小豆島の伊喜末八幡祭礼のように歌詞や曲調から正しく「御船歌」の系譜をひくと推定されるが、いかなる経緯で当該の祭礼に受容されたか不明の場合。

D 当該地域の中心的な祭礼の「祭礼御船歌」が周辺に伝播したと考えられる事例、たとえば和歌山県下の沿岸部には、十か所程度「祭礼御船歌」が確認されており、和歌祭の影響下に伝承されていると思しき場合である⁽⁶⁾。

以下にこれらのうち比較的まとまった資料が得られたAとCについて詳述する。

A-1 和歌祭(和歌山市)



写真1 お旅所における御船歌奉納(和歌祭)

正式には紀州東照宮例祭といい、藩政時代は城下をあげて執行された典型的な城下町祭礼である。祭礼は和歌山東照宮から和歌浦に設定されたお旅所へ神輿が渡御する。その行列の中に「唐船」と呼ばれる竜頭鵜首りょうとうげきすを模した船型の造物屋台が供奉し、これに御船歌が付随している⁽⁷⁾。

大太鼓を囃子として水主姿もりりしく勇壮活発に歌われる。

和歌祭には多種の練り物が出るが、唐船ははやく元和8年(1622)の次第書に登場し、正保3年(1646)住吉如慶描く『紀州本東照宮縁起』にも描かれ、その古い来歴を誇っている。

現在歌われている曲目は「あめふり」(長歌)、「端唄」「せり唄」、「やれ節」などであるが、かつてはより多くの曲目が伝承されていたようである。歌本は複数伝存しており、最古は明和7年、これ以外に「祭礼船歌」と題するものが『日本歌謡類従』(大和田建樹編、博文社、明治31年)に収録されている。いずれもほぼ共通する30数曲を収録している。これらのうち、「鹿島」、「日月」、「栗島」、「和歌八景」を常例とし、その他殿様の御所望によって何でも歌ったという。

現行の詞章中には民謡風の歌詞も取り入れられている、現代にも作詞作曲が行なわれたことが確認できるから、その時々で取捨選択、新作、変更が行なわれてきたと思われる。

ところで唐船に関するもっとも古い記録である『元和八年次第書』は以下のように記している。

六拾人唐船作り物 但、緞子さやにて包、幕しゅちんひろうどもへに鳳凰竜あり 貳拾人 右に舟水主歌を 歌い候もの 此出でたち緋ちりめんの単物 三人 唐人、右の舟乗 此出でたち黒ひと(ろ?)うど合羽羅紗着ル いづれも金の団持 六人 やり持 右同舟入 五人 こはた持 右舟 二人 かいふき、同舟 二人 小つみ、同舟 壱人 太鼓、同舟

この記事では「舟水主歌」は20人で歌い、緋ちりめんの単衣を着し、囃子は法螺貝、小鼓、太鼓とする。また唐人装束の者が三人船上に乗るとあるが、現在は御船手方の「看板御仕着」であった紺地に白大格子の法被を着用して楽器は大太鼓と法螺貝が使用されているから、視覚的な趣向にも変遷があったものかと思われる。

以上見てきたように和歌祭りにおける祭礼御船歌は、当初のものから多少とも変化している可能性が諸所に見受けられる。そもそも、関船を模した船型屋台を「御座船」とは称さず「唐船」と命名されている点も異例である。

じつは藩政期における和歌祭には、唐船とは別に御座船上で歌う本来的な「御船歌」があった。祭礼当日片男波の沖合いに本物の御座船が2隻海上を巡る。これを「船舞」と称した。その様子を『南紀徳川史』(第8巻)は、

因に記す毎歳四月和歌御神事には大関船和歌浦へ出航御船舞といふを行ふる事恒例なり逐浪丸出れば風波暴起すといひ伝へ一両回出たれ共近世は文彩丸のみ出る也御船手方古老の者語る処の順序左の如し。

御関 文彩丸 紅梅二艘 ちよ舟若干
四月十四日に御船を出し十五日に飾りを付十六日湊浜へ廻り紅梅二艘舞廻り十七日暁方皆和歌浦へ廻り御関舞巡る此時太鼓を打鳴らし貝を吹き拍子を取り(天下取った取ったと云囃子なるよし) 櫓手一斉に船歌を和唱優美壯観を極む櫓四十八挺に御水主九十六人一挺に二人つつかかるもし櫓を漕き折れば米一俵つつを褒賜且此時に限り御水主一同へ扶持米の外に米一俵つつを賜るの例規也と太鼓役員役歌唱ひ櫓手共皆御水主なれ共十七日丈は才か崎舟子をも雇ひ入ると云。

また『紀伊国続風土記』(天保10年刊)は「其時和歌浦に楼船を浮へて船歌を発して楼船を操とる海陸合わせて響き滄溟に渡り龍神も感応すべくおもはる」と記し、陸上渡御行列の種々の芸能と海上の「御船歌」とがあい和し壮大で勇壮ないかにも城下町祭りに相応しい光景を現出した。

そもそも「唐船」とは謡曲の曲名で、その梗概は、唐土明州の住人祖慶官人という者が日本との争いで捕らえられて日本に留められ、箱崎の某に使われて牛飼いをして過ごすうち2人の子をもうける。一方、唐土にも2人の子が残され、父の生きていることを知って、船に宝を積んで箱崎にやって来る。祖慶は帰国しようとするも、日本でもうけた2人の子は遺さねばならず、唐土の2人の子との間で板ばさみになった祖慶は「身は一つ、心は二つ」と海に身を投げようとする。その親心に打たれた箱崎の某が日本の2人の子を連れて帰国することを許す。親子は喜び、楽を奏して出船に乗り唐土をめがず、というものである。『元和八年次第書』に唐人装束の者が乗船して

いること、楽器に小鼓が入っている点などもとは謡曲に取材した趣向であったと考えるのが穏当であろう。

この謡曲の最後は「かくて余の嬉しさに、時刻を移さず、暇申して唐人は、船にとり乗押し出す、喜びの余りにや、楽を奏し船子共、棹のさす手も舞の袖、折から波の鼓の、舞楽につれておもしろや。

陸には舞楽を、乗じつつ、陸には舞楽を、乗じつつ、名残ををして、海づら遠く、成行ままに、招くも追風、船には舞の、袖の羽風も、追手とやならん、帆を引きつれて、船子ども、帆を引きつれて、船子どもは、喜び勇みて、唐土さしてぞ、急ぎける」という詞章で結ばれる。

想像をたくましくすれば、『紀伊国統風土記』がいうところの「海陸あい和す」という光景に呼応した演出としてこの謡曲が選ばれたのではないかとすれば、^{りょうどうげきす}竜頭鷓首の造形は、唐人の乗る異国的な船をイメージしたものということになる。もっとも^{りょうどうげきす}竜頭鷓首は、「御船歌」においては御座船を文学的に表現する場合に用いられる文言でもあったから、当初から二重の意味を担っていた可能性がある⁽⁸⁾。ともかくもこの謡曲の融和、友好の主題は後になると後退し、御座船や「御船歌」の持つ勇壮な雰囲気前面に押し出されていくようになったと考えられる。

A-2 浜崎住吉祭(萩市浜崎)

萩藩の経済を支えた港である浜崎に所在する航海の神住吉神社の例祭。浜崎には領主の御座船を格納した御船倉が現存し、藩政時代は御船手組も居住していた。現在の祭礼は神輿渡御とこれと平行して「お船」と称する御座船を模した船型山車や踊り車が浜崎から出て城下町を巡行する。「お船」と神輿は北の城門～城郭～菊屋家(毛利輝元以来代々大年寄格に任命され藩の御用達を勤めた家)～住吉神社という道順であったという(『萩市域民俗調査報告書』11)。現在も近世期とほぼ同じルートで巡行している。この「お船」上で「御船歌」が歌われる⁽⁹⁾。

この「お船」は萩藩主が下賜したものと伝えられ、藩政期には御船手組の歌水主が乗ったと言われている。

萩藩においても一般人の「お船歌」の演唱は禁じられ、演唱者も世襲的な藩の階級である「浜崎歌舸子」の家柄の者十四人に限られていた。神幸祭のうち「お船」と「お船歌」に関する事柄だけは、神社とは直接関係なく御船倉の所管とした。また「お船」を曳くのは、御船倉に所属している「協敬組」という者の世襲の職務であった。明治以降は藩との関係はなれ、神幸祭の行事のうち「お船」に関する事柄だけは浜崎の魚問屋が主催し、自家の使用人を使って「お船」を曳かせ、問屋の若主人たちが「お船歌」を歌っていたが、後には浜崎町内で引き受けるようになり、演唱者も浜崎町内の一般男子から選ばれるようになった。(『萩市史』第3巻)。



写真2 座敷における詠唱(浜崎住吉祭り)

歌い手は白麻袴姿で乗船し、法螺貝の合図で出発して、適宜要所に留まって「御船歌」を歌う。歌い出しに法螺貝が鳴らされるが、基本的な囃子は三味線・締め小太鼓で、音楽としては近世邦楽的になっている。ただ音頭取りが歌い出し、その他がこれに続いて唱和する「御船歌」の形式を取っている。歌は一種類で歌詞は以下のようなものである。

芽出度の又の若松が (付) 枝も栄えて葉も繁る

我が住家は丹波の山の谷合谷底の芝葉の庵もなつかし

(付) 都なれども旅は悪い

滋賀の唐崎なる一つの松は唐衣段交い筋り振りようござる。松

鶴金鶴すじりもじり聞けや人、女郎女郎や巡礼が、

(付) 足も柔いで連れを待つ。
皆もご存知ございましょうがな裏の書院の小松の小枝に百舌が
宿りて明朝の夜明けにはキリンヤキリンヤキリと鳴く、さて鳴くよ鳥
エー鳴くまいか (付) 鳴くは深山のほととぎす。
芽出度や若松 (付) 枝葉も弥生

(保存会作成のパンフレットによる)

内容は数首の端歌やカスリによって構成されているように見受けられ、他の御船歌諸本に共通するものも一部含まれる。

住吉祭礼における「お船」は祭礼の当初から付随していたものではなかったようだ。

『住吉明神勧請由来』に

祭礼之儀者萬治二年(1659)六月二九日より初申候。萩市中よりは小き車を飾り子供に引せ申候。浜崎よりは小き車船を子供に引せ船歌をうたひ……(以下浜崎祭礼の引用文献は平賀禮子『御船歌の研究』による)

とあって、この時点では船型屋台であるものの、御座船型ではなく、船歌も「御船歌」ではなかったのではないと思われる。

これより20年ほど後の延宝六年(1678)とされる記事に「新町浜崎・船小歌、太鼓・鼓・サミセン」(『寛文六年～元禄十二年・通り物』。)とあって、ここで船小歌、三味線など現行のイメージに近いものが登場している。祭礼音楽に三味線が導



写真3 「お船」(浜崎住吉祭り)

入される時期としては格段に早いので後考を待ちたいが、この地の場合、近世芸能を祭礼芸能に受容した後に「御船歌」が導入されたかと思われる。

C-1 坂越の船祭

港町坂越の氏神である大避神社の祭礼で坂越湾内にある生島をお旅所とする船渡御祭。神輿船の前後に獅子船、頭人船、楽船、歌船などが船団を組み、これを權伝馬が曳航する。総数10隻を越える和船で統一された古式の船渡御祭である。この中の小早型の軍船を模した「歌船」に歌船組が乗船し、要所で「御船歌」を歌う。

船渡御祭の記録は享保11年(1726)から始まり、初期のころは不明であるものの、天保年間以降現在まで廻船業を営んでいた福田家を中心となって「御船歌」を担当している。福田家に蔵されている歌本は文化8年本を最古とし、伝本は7本を数え長歌12首と葉歌10数首を記載している。他地域の祭礼「御船歌」と比較して歌数が多く、また歌唱の形式も本格的な「御船歌」の伝統を保持している。曲目も諸藩の御船歌本と基本的には共通し、中でも収録曲目や順序、詞章などは広島浅野藩御船歌と共通する点が多いといわれている。浅野藩の御船歌本は「大坂御船手歌江戸吟」と題され、幕府所管の大坂御船手組が伝承していた「御船歌」であったと思われる。幕府の御船歌本と比較すると独自のものも含まれ、中でも「道頓堀」はいかにも大坂で伝承された歌と思われる。これが坂越の歌本中にもあり、坂越の祭礼「御船歌」は浅野藩御船歌あるいは大坂御船手の御船歌を参照した可能性が高い。

一方、坂越で独自に創作されたと考えられる曲目があり興味深い。「生島」と「淡路」で、とくに「生島」は、歌中に「千百あまりの年ふり」とあって、江戸後期に大避神社の臨時祭礼のために独自に創られたものと思われる。

現在祭礼に歌われるものは「出し歌」、「葉歌」(複数)、「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「止歌」で、実際の歌唱の構成としては、「出し歌」—「葉歌」—「止歌」、「出し歌」—四季の歌—「止歌」というパターンになる。

歌い方はサンジが歌い出し、その後を一同が付ける。節はできるだけ引き伸ばし、ゆっくりとしたテンポで歌うことが重要であるとされる。現在は船端に一列にならんで歌うが、昔は櫓を漕ぎながら歌ったという⁽¹⁰⁾。

総じて坂越の船祭りにおける「御船歌」は、個々の「御船歌」のみではなく、歌唱の形式も正統的な「御船歌」の形式を忠実に学んでいるらしい。その一方で、この祭礼にあわせて独自に創作された歌も含まれており興味深い。



図版 「歌船」(『大遯神社祭礼絵巻』奥藤利文氏蔵、より)

坂越の船渡御祭は、幕末に描かれた絵巻の艀装などをみると鯨幕が多用され、船首、船尾には吹流しや轆が供えられて、御座船型の歌船の存在ともあいまって全体として海の参勤交代が参照されていると推定される。坂越は瀬戸内海の重要な港として古くから栄え、参勤交代の規定の寄港地とはされていなかったものの、風待ちの港として重用されていた。したがって身近に参勤交代の船団を見る機会に恵まれていたことと関係あろう。

その格式の主張とかかわるように、歌船はあくまで神輿を守るものとされ、海上渡御では神輿船の後ろに付き、御旅所に神輿船が到着する直前に先回りして、これを迎えるような位置に停船して歌う。また、陸渡御の際には、歌船組は弓を持って神輿の前後に従う。

松江藩では相撲と弓術が御水主の必須の修練とされていたといい、姫路藩も藩主の狩に供奉することが通例となってお

り、弓術は御船手組の素養としてひろく行われていたことの反映であるかもしれない。



写真4 「歌船」(坂越の船祭り)

C-2 伊喜末八幡祭礼(香川県小豆郡土庄町)

山頂に鎮座する神社から山下のお旅所へ神輿が渡御する。山下のお旅所前で大形の舁き形式の太鼓屋台が多数練って耳目を集めるが、これとは別に神輿の渡御が山下に近づくと「御座船」と称する船型山車がこれを迎えてお旅所まで先導する。つまり「御座船」は他の祭礼屋台とは別格の位置づけにある。これに「御座船歌」が伴っている。近世の状況は不明であるが、現行の御座船は明治33年建造である。

曲目は、「あわしま」「初春」、「出船」、「川なる」、「こなた想い」(端歌)、「あの橋」、「古木」、「天保山」、「しるしぎを」、「千秋楽」、「おはらひ」などでいわゆる「御船歌」の系譜につながるものと思われる。

以下「出船」の歌詞を掲げる。

《出船》

ヤアーレヘヒレフウハ

出船じゃよな 今朝の出船にエ

おそひこしゆしから 浜へも

お手をあげてまた涙 あいほろり

ほろりイほろりとひともこぼしたる

はよやどほほのんほほいハアドッコイ
かのさまかなやほいほいなごほほこれさ
これへごほほいこれにやふほらん
ほヲれへいえこひへひへんへやあれえ
のをろのんほほ

現在は歌い手がいなくなりテープで代用しており、伝承性が希薄であるが、『香川県史』（第14巻）によれば初めに歌うのをマクラと呼び、「でふね」が歌われ、「千秋楽」で終了する。昔はこの間にいくつかの端歌が歌われたという。このように次第によって曲目が定まっている事例は、種子島や坂越の事例と共通する。

終わりに

「祭礼御船歌」が付随する祭礼の出し物は、

A 頭人船や神霊の乗る神輿船、あるいは陸上を巡行する神輿など、祭礼行列において神聖性を帯びた格別なもの。

B 神霊などの乗り物には直接付随しないが、「御船歌」を神霊に捧げる聖なる歌としてこれに供奉するものと理解されているもの。

C 神聖性を帯びるとまではいえないが、領主の乗る御座船を模した屋台などに付随しているもの。その中には藩主下賜を伝える格式を主張する場合もある。

という類型に整理することができるだろう。いずれもある種の格式や権威を標榜する場合に使用されている。また、その芸能的側面は、音頭出しと合唱という歌い方の形式、「出し歌」、「止め歌」に相当する祝儀的性格を持つ歌を含むのが一般的である。

これは「御船歌」が船の航行に伴う歌謡であること、すなわち労働歌の一種であることが祭礼行列の出し物の巡行を囃す機能を持つものとして転用しやすかったからでもあろう。加えて荘重典雅な演出が期待されたと思われる。

曲目も多くは「御船歌」をそのまま使用していて、「皇帝」、

「初春（鑑くどき）」など「御船歌」として重要視されていた歌が「祭礼御船歌」でも重要視されあるいは多用されている。つまり「御船歌」の持つ規範意識がそのまま採用され、祭礼におけるある種の権威とむすびついて使用されている。

歌謡としては「御船歌」とは異なるものとなっている萩住吉神社の場合でも「あらかじめ神社で指定された場所以外は許されない」（『萩市史』第3巻）、というように現代もその格式を伝えているものが多い。

民俗芸能と比して自由度が低い、それでも祭礼に合わせて創作されていることは注意される。

「祭礼御船歌」は下野敏美氏によれば青森県から鹿児島県までの沿岸地域に分布するが、西日本にとくに濃密に分布している。本稿は西日本のうちのごく少数の事例を民俗芸能史的視点から論じたものであるが、音楽的な方面からは岡田千歳、小野寺節子によって、愛媛県東部、相模湾周辺、仙台など、藩が管理してきた「御船歌」を受容したと思われる祭礼御船歌の研究が進展している。

ともかくも徳川幕府の権威を背景に成立した「祭礼御船歌」は、祭礼芸能としても古典に属しているため、近代以降急速に退転、あるいは退転しつつある。今後同様の事例研究が急務であると思われる。

註

- (1) 松江藩の御船手組に所属して「御船歌」をよくした父を持ち、したしくその歌唱を聞いていた足立鉄太郎の著述になる『松江權歌考解』は「謡曲よりも幸若に近い」と述べている。
- (2) 『松江權歌考解』（足立鉄太郎、大正8年）は「かすりは節の名にして、余音嫋々たるを形容せる故なるべし」とある。
- (3) 姫路藩の御船歌は独自のものと認められていたようで、他藩の御船歌本に「播磨吟」という名称が見られる。
- (4) 祭礼御船歌、たとえば坂越の船祭の場合、かつては櫓を操りながら謡っていたといい、太鼓・半鐘も用いられるが謡う時には使用しない。高松の石清尾八幡祭礼には松平藩の大名船を模したものが登場するが、これに付随した船歌の場合は、大太鼓のみ。現行の

和歌祭も法螺貝を最初の合図に用いるが基本的には大太鼓のみである。これらは陸上における船型屋台であるために櫓拍子は使用できなかったためと思われる。

- (5) 御船手組は本来は水軍として組織されたが安定した時代にあつては、藩主の参勤交代、遊覧、海上警備、大坂蔵屋敷への藩米の回漕が主たる仕事であった。
- (6) 小西沙和「和歌山の御船歌と祭り ―和歌裏東照宮の和歌祭を中心に―」(国学院大学伝承文化学会『伝承文化研究』、2007年)に概要が示されている。
- (7) 廃藩後も「唐船御船歌連中」と称して、御船手方の末裔やかつて御船手方が居住していた港町在住の人々によって継承されていたが昭和55年に一時廃絶していた。これを平成22年復活して現在に至っている。
- (8) 謡曲「自然居士」に「また君の御座船を竜頭鷓首と申すも、この御代より起これり」とあり、「御船歌」の「皇帝(黄帝)」はこれを引用している。
- (9) 住吉神社は城下の鎮守とは異なるが、藩主が大坂の住吉大社を勧請したと伝えられる。また寛文6年からの祭礼記録である『住吉町順番帳』では、城下町すべてが含まれているから、当初から城下町をあげての祭りとして仕組まれていたらしい(清水論文)。したがって浜崎住吉祭は城下町祭礼に順ずるものとして位置づけられていたかと推定される。
- (10) 曲目の機能、歌唱の実際、囃子の部分は『坂越の船祭り総合調査報告書』(赤穂市教育委員会、平成22年)中の、京都市立芸術大学田井竜一氏の調査報告による。

参考文献

- ・本田安次『日本風俗史事典』、船歌の項、昭和54年
- ・米田頼司『和歌祭り 風流の祭典の社会誌』、帯伊書店、2010年
- ・浅野健二編『御船歌集成』、『日本庶民文化資料集成5 歌謡』三一書房、1973年
- ・浅野健二編『御船歌集成』、『続日本歌謡集成3 近世編上』東京堂出版、昭和55年
- ・下里静『姫路藩御船手組の研究』、昭和59年
- ・平賀禮子「御船歌の研究」三弥井書店、1997年
- ・『高松今昔記』第1巻、歴史図書社、昭和53年
- ・喜多村進「和歌祭り」『御船歌集』、『紀州文化研究』第1巻第5号1937年
- ・浅野健二「御船歌」の伝承と音楽性』、『日本歌謡研究』第5号、昭和42年
- ・成田守「『御船歌』について」、『東洋研究』177号、2010年
- ・下野敏見「南日本「御船歌」の研究」、『御田植祭りと民俗芸能』岩

田書院、2004年

- ・岡田千歳・小野寺節子「お船歌の研究」 日本民俗音楽学会における一連の発表(2004年～)。
- ・清水満幸「住吉祭り考 ―その1―」『萩市郷土博物館研究報告』第10号2000年
- ・清水満幸「住吉祭り考 ―その2―」『萩市郷土博物館研究報告』第11号2001年
- ・『萩市域民俗調査報告書』11、山口大学人文学部社会情報論コース湯川・坪郷研究室2006年

参考資料

① 仙台藩の場合

「その粧たるや、かさじるし・船じるし・幕幔に綾羅をかざり、色さままの看風旗を翻して、前後八十棹の櫓脚を揃ひ、舷を撃つて水主楫取同音に棹の歌を発声す。音節甚だ古雅にして歎賞すべし。よりにここにその一、二歌を載する。

やや、めでたやな。はつ春の。よきひをどしの。きせながは。エイ、小ざくらをどしとなりける。エイ、さてまた夏は卯の花の。エイ、垣ねの水にあらひかは。秋になりてのそのいろは。いつもいかに勝つ色の。エイ、紅葉にまがふ錦かは。冬は雪げの空はれて。エイ、かぶとの星の菊の座も。エイ、はなやかにこそをどしげの。思ふかたきをうちひとり。エイ、我が名を高くあげまくも。エイ、つるきは箱に治めおく。弓矢ふくろをいださずし。エイ、富貴の国となりける。ヤンラ。この船唄、四十七歌ありと云ふ。これは鎧どきと云ふ。外にもさまざまの題あり。名所の二おめはづかしや。恋口説の二よしやただ・婿入・西行もどりなど云へる、をかしき文句あり。(『奥州名所図会』)

② 種子島の場合

「二十家伝記に云(註、二十家は種子島氏の家臣団)、御召船水主の事。三カ浦の者へ歌頭老人(是を歌之助といふ)、又助役老人、御船頭吟味の上申付置、御入船の節、浦口の沖にて御前よりうたわせよと御船頭へ御意下りたる時、御船頭注蓮を取りて加子共に向ひ、歌之助諷でもうせと申渡すはつとめでたやと、猶予なく歌之助うたひあげ候得ば、乗組加子一同で諷ひ申候。此時、恭御船頭共かね太鼓を打ならず。先一番に櫓歌、二番さげ、三番にかすり、四番松口解、五番に浄也。此浄也の歌を諷ひ終る時、日出度御着船遊さる也、云々」(「種子島関係近世文書(天保七年羽生六郎左衛門道潔記)」-下野敏見「南日本「御船歌」の研究」による)

③ 坂越の船祭りの「御船歌」楽譜

御船歌

出し歌・葉歌

[出し歌]

♩=52 サンジ



や いらめ エでエ た アた アこよ わア めエ で



た ア アイ の を の エエ イそオ れ エわアか え だ も



エイ さア かアの エー イコ ノ はア



も をオ き み が よ わ ひさ し



か ろ べー き ためし に わ かねて な が



め いわ すみ よし の ま つわ め だ い



い や いレー エ イわ か え いだ あ



も お さ よ え エ さ



いた エ やあ よ エエエ は も オ オ

律音階でつくられていて、貴族的な趣のある曲である。

御船歌（全曲）の音高は相対音高である。

（鈴木由起子氏作成 『坂越の船祭り総合調査報告書』より）

